第２回

萩前（はぎのまえ）・一本木（いっぽんぎ）遺跡　現地説明会

第３～６調査区全景（南西を望む）
（平成 23 年 10 月 19 日撮影）

平成 23 年 11 月 19 日

高松市教育委員会

萩前・一本木遺跡について

萩前・一本木遺跡では，これまでに第１～９調査区について調査を行っており，竪穴建物，掘立柱建物，土坑，溝など，多くの遺構を検出しました。

竪穴建物では，竈（かまど）のある建物を多く確認しています。竈は非常に残りがよく，県下でも良好な資料となるでしょう。また，非常に規模の大きな柱穴からなる掘立柱建物を検出しています。

遺物では，須恵器の杯身（つきみ）・杯蓋（つきふた）・杯（つき）・高杯（たかつき）・壺（つぼ）・甕（かめ），こね鉢，盤（ばん），土師器の壺・甕・杯・高杯，石器，玉類，鉄器などが出土しています。

今回の第９調査区の調査成果から，萩前・一本木遺跡の古墳時代の集落の西端がわかり，萩前・一本木遺跡の様相が次第に明らかになってきています。また，古代の大溝が確認できたことから，この時期に遺跡周辺で大規模な土木工事が行われていたことがわかりました。

今回の現地説明会では，第８・９調査区について，調査結果を公開させていただきます。

図１　調査区配置図

写真１　第５調査区 竪穴建物１

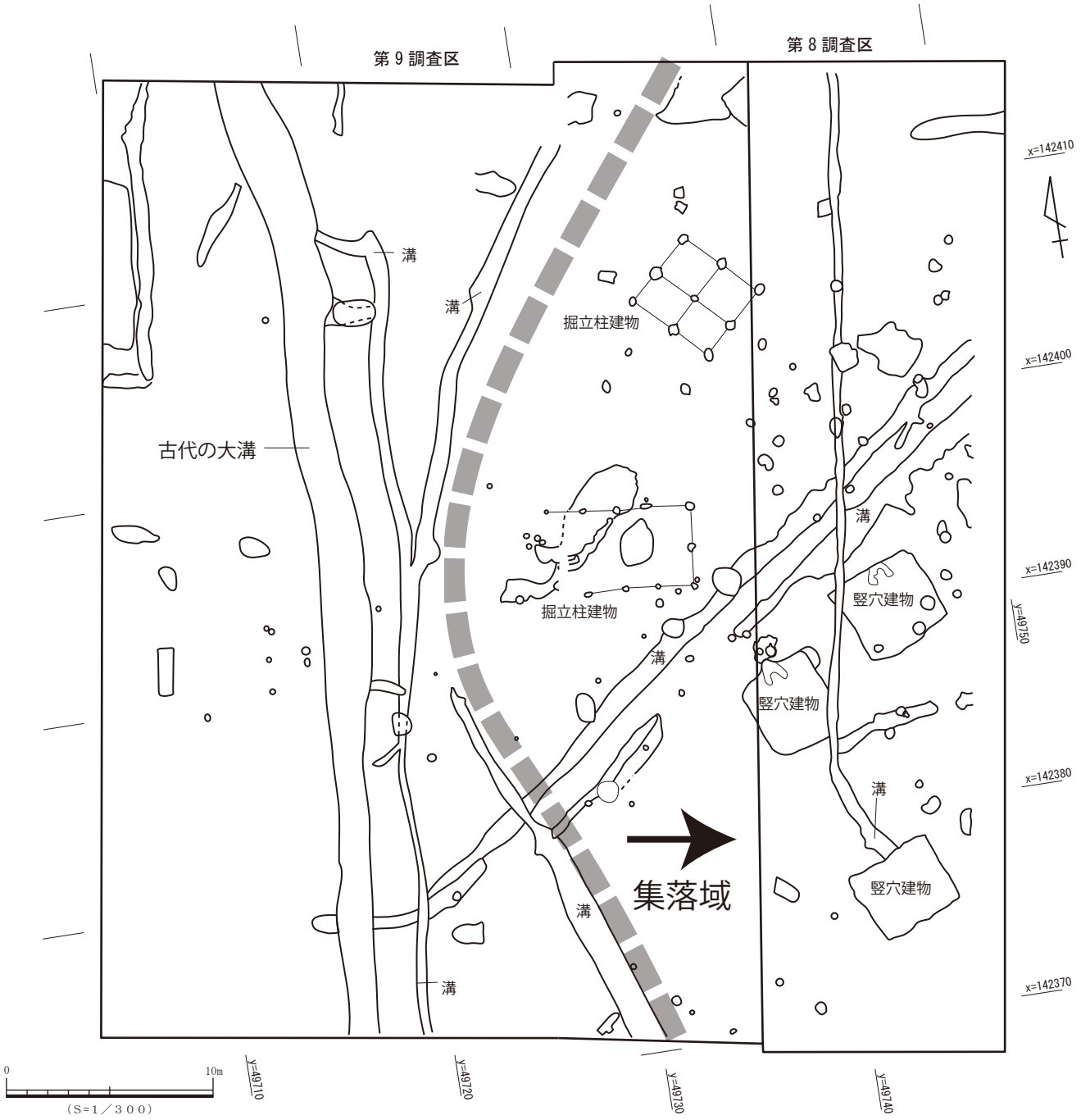

図２　第８・９調査区遺構配置図

５調査区 竪穴建物１

写真２　第５調査区 竪穴建物３ 竈

写真３　第３調査区 竪穴建物 45 竈

調査成果

第８・９調査区では，竪穴建物３棟，掘立柱建物２棟を確認したほか，溝を複数条検出しました。

竪穴建物は，正方形の建物で，一辺が約 3.6m，面積が約 13.0 ㎡，長方形の建物で，長辺約 4.0m，短辺約 3.6m，面積が約 14.4 ㎡です。

竪穴建物には，北側に炊事用の竈を造り，建物内に入ってくる雨水を逃がすために，板材などを並べて壁の保護施設としていた溝が掘られています。出土遺物の年代から，古墳時代後期（６世紀後半～７世紀初頭）の竪穴建物と考えられます。

掘立柱建物は，倉庫と考えられる２間 × ２間の総柱建物と，２間 × ４間の側柱建物を検出しました。このうち総柱建物は，竪穴建物の向きと同じ方位を向いていることから，同時期の建物と考えられます。側柱（がわばしら）建物は，柱穴の埋土が他の遺構と違うことから，新しい時期の建物と考えられます。

溝は第８・９調査区ではたくさん検出しましたが，このうち第９調査区西側で幅約 1.5 ～ 3.0m，深さ約 1.0 ～ 1.5m の大溝を検出しました。溝の下層は黒色粘土で埋没していましたが，上層～中層にかけて水の流れた痕跡を確認しました。この溝はこの周辺地域の基幹水路の可能性があります。下層から出土した遺物の年代から，飛鳥時代（７世紀中ごろ・古代山城屋嶋城が築かれた時期）の溝と考えられます。

今後も，萩前・一本木遺跡の発掘調査を実施していきます。調査が進むにつれて，萩前・一本木遺跡の集落の広がりや当時の生活状況が解明され，この地域の歴史に新たな１ページを刻むことでしょう。今後の調査成果に御期待ください。

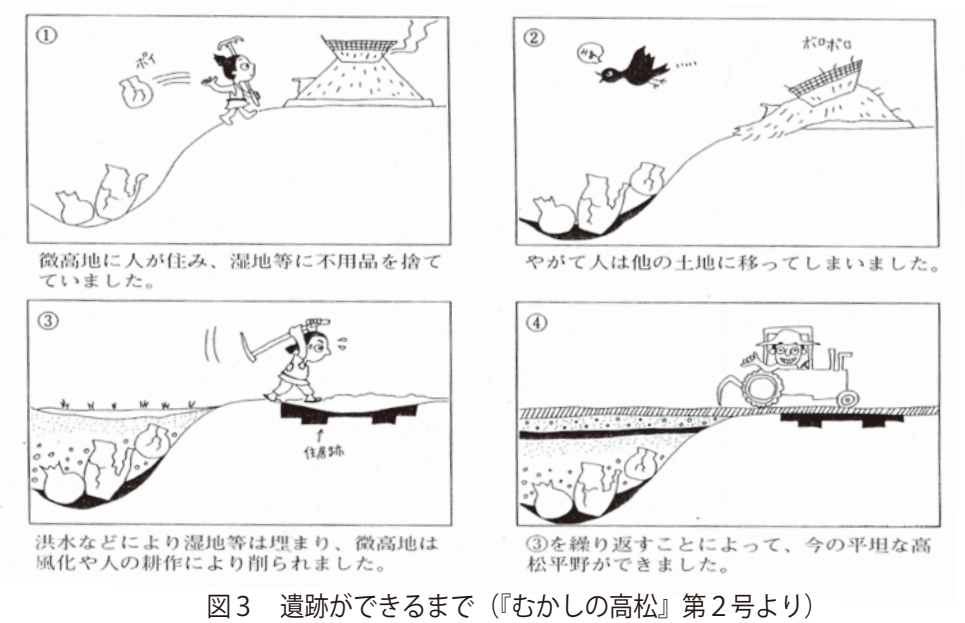

図３　遺跡ができるまで（『むかしの高松』第２号より）